

## 根本分裂の原因に関する一考察

李 慈郎 (LEE, Ja-rang)

### I. はじめに

仏教教団史の中でも、教団がいつ最初に分裂を起こし、また、その原因は何であったのかという問題は、従来多くの学者たちが関心をもって議論してきたテーマの一つである。分裂の原因を記した諸記録の内容を大別すれば、戒律上の問題と教理上の問題との二つに分かれると見てよい。前者の伝承としては、第二結集の結果、上座部 (Sthavira) と大衆部 (Mahāsaṃghika) の二部に分かれたという Theravādin の記録に代表され、そこでは、仏滅後100年の時、Vesālī に住んでいた Vajjiputtaka と呼ばれる比丘たちが主張した、律に違反する「十事」を原因として分裂が起こったとしている<sup>1)</sup>。後者は、Mahādeva が五項目にわたって主張した、阿羅漢の悟りを低く見る「五事」が問題となり、その結果、上座と大衆という二つに分かれたという Sarvāstivādin の伝承である<sup>2)</sup>。

従来、これらの伝承は、仏教教団で起こった最初の分裂の出来事を伝えるものとして注目され、その分裂の直接的な原因を探ろうと、様々に検討されてきた。この問題については、諸学者の間で、意見は二つに分かれている。先ず、戒律における意見の不一致を原因として分裂が起こったと見る場合、それはパーリ律や四分律などの諸律とパーリ年代記の伝承に基づいて結論されている。例えば、Geiger [1912] intro, lix は、パーリ年代記などに伝えられている伝説をそのまま受け入れ、Vesālī 結集の「十事」を分裂の原因として見ているのである。

教理の問題を分裂の原因と考える代表的な学者には、Bureau [1955a] がある。彼は、仏滅後137年、Nanda Mahāpadma の治下、Pāṭaliputra において、Mahādeva の「五事」を原因として、分裂が生じたと見ている。また、Frauwallner [1956] 5-6 も同様、教理に関する意見の相違によって学派たちが生じたと見なしている<sup>3)</sup>。

一方、Nattier & Prebish [1977] 238 は、分裂が戒律の問題から生じたと考えているが、その根拠として「十事」とは別の理由を挙げている。すなわち、大衆部の伝承である *Śāriputrapariṣcchāsūtra* の記述に目を向け、最初の分裂は従来言われてきたように大衆部の放縦に対する正統派の反発というよりは、上座部が根拠もなしに律の条項を拡大することに対する大衆部の反発を原因として起こったと主張している。そして、その根拠として、大衆部の波羅提木叉の条文数が他の学派のそれに比べ最も少ない点を指摘している。

以上の三つの意見が、根本分裂の原因に関する従来の代表的な意見であると思われるが、本論文は、以上の三つの伝承を検討、特に、これまで顧られなかった Nattier & Prebish [1977] の研究に注目しながら、分裂の原因を探ることを、その主な目的とする。諸律の、ことに衆学法にみられる差異を考慮に入れる時、どうしても看過することのできない見解だからである<sup>4)</sup>。

## II. 根本分裂の伝承

仏教教団が上座部と大衆部の二つに根本分裂を起こしたという伝承は、南伝及び北伝の多くの資料に見られるが、その内容は大きく相違している。既に、これらの資料は碩学たちによって詳しく比較されているので<sup>5)</sup>、ここでは、問題になる幾つかの代表的な伝承だけを挙げることにしよう。

### 1. Vesālī結集の「十事」(Theravādin)

- (1) *Cullavagga*, XII., 摩訶僧祇律, 五分律, 四分律, 十誦律, 根本有部毘奈耶雜事, 毘尼母經.: 律藏七百犍度の伝承で, Vesālī結集の時, 律に違犯する「十事」が問題になってサンガの中で争いがあったことは伝えられているが, この結果分裂が生じたとは言っていない。

ただ, これらの伝承の中で, 大衆部の律である「摩訶僧祇律」だけは「十事」の中で, 金銀受納だけを問題にし, また, 結集の内容も「十事」ではなくて, 「五淨法・九法の序・毘尼の五事の記」となっており, 第一結集において編集された律の再結集であったとする点には注意しておきたい<sup>6)</sup>。

- (2) *Dīpavaṃsa*, *Mahāvamsa*: 律藏の伝承と同様にVajji族の比丘たちの「十事」を問題とし, この争論の結果, 厳格に律を守ろうとする長老たちとVajji族の比丘たちの間に根本分裂が起こったことを伝えている。長老たちは「十事」を破り, 七百人の阿羅漢を選んで法の結集を行ったが, 上座らの決定に不満をもった悪比丘である, Vajji族の比丘たちは他の味方を得, 別に一万人が集って大合誦と呼ばれる結集をなしたことが記されている。前者を上座部と, 後者を大衆部とする<sup>7)</sup>。

### 2. Mahādevaの「五事」(Sarvāstivādin, Saṃmitīya)

- (1) Vasumitraの『異部宗輪論』(*Samyabhedoparacanacakra*), 『大毘婆沙論』: Sarvāstivādinの伝承で, 大天(Mahādeva)という比丘が説いた「五事」を原因として, これを受け入れた大衆部と認めなかった上座部に分裂したと伝えられている。諸文献中, 『大毘婆沙論』には, Mahādevaに関するもっと詳しい記述が見られる<sup>8)</sup>。
- (2) Bhavyaの*Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna*: ここには三つの伝承が伝えられているが, その中で, 第三説にSaṃmitīyaの伝承として, Bhadraという比丘が主張した「五事」を分裂の原因として挙げている<sup>9)</sup>。

### 3. 旧律の改編増広(Mahāsāṃghika)

『舍利弗問經』(*Śāriputrapariṣcchāsūtra*): 旧律を支持する者と新律を支持する者との二つに意見が分かち, 前者は数が多かったので大衆部(Mahāsāṃghika)といい, 後者は少なかったので上座部(Sthavira)と名づけられた。ここでは, 律を増広した上座部に旧律を守ろうとする大衆部が反発したことになっている<sup>10)</sup>。

これらの伝承には, 教理的な理由と戒律的な理由という全く別の分裂の原因が記されている。以下, 従来の学者たちの研究を参考にし, 検討してみよう。

先ず, Vesālī結集で「十事」が問題になったことを伝える諸律の七百犍度の記述であるが,

幾つかの相違点を除いて、上座・大衆の諸律における記述は相互に類似している。すなわち、仏滅100年後、VesāliでVajjiputtakaという比丘たちが金銀を求め、比丘の間で分配していた。これに反対したYasaという比丘が、西方へ行って味方の比丘たちの助けを得、Vesāliに集まって議論した結果、Vajji族の比丘たちの行いは、律に反する行動として不浄であると判断されたとされている。

しかし、基本的にこの伝説自体は一致するものの、そこに施される説明にはおよそ整合的解釈の成り立たないほどの不一致が見られる。先ず、結集の内容をみると、上座部では、律に違犯する「十事」に対する判定をその内容としているのに対して、大衆部では、律の再結集で、第一結集の場合と同じ「五浄法」・「九法の序」・「律の五事の記」を記している。また、比丘たちの間で論争が起こるようになった原因に関する記述も、諸律とも、Vajji族の比丘たちの金銀受納が問題になって、比丘たちの間で、論争になり、結集が起こったとしている点では一致しているが、上座部では、これにまた九事を加えて「十事」を結集の原因として挙げている<sup>11)</sup>。その一方で、大衆部の律である『摩訶僧祇律』では、「金銀受納」だけを問題にしているのである<sup>12)</sup>。

この矛盾を理解するために、学者の間では様々な説明が試みられてきたが<sup>13)</sup>、少なくとも、そうした見解を総合しても、パーリ年代記に伝えられているように、「十事」の問題で教団が分裂したとは考えられない<sup>14)</sup>。その理由として第一に、諸律は、論争の結果分裂が起こったことについて全く言及していないという点が挙げられる。もし、これをきっかけとして分裂が起こったとすれば、結集に関してこれほど詳しい説明を与えながら、その結果分裂が生じたことを省略するはずはないだろう。むしろその逆に、すなわち、諸律の記述だけをみれば、結集に参加した比丘たちはその結果に満足し、サンガの律は再確立されたことになっているのである。

また、大衆部の立場として伝えられる「十事」あるいは「金銀受納」の点についてはどうであろうか。上座部の説明では、「十事」を主張したのは大衆部になるが、『摩訶僧祇律』のVesāli結集の説明のところでも、「十事」はないが、最も大きな問題であった「金銀受納」を挙げ律に反するものとして判断しているし、また、他の九事も『摩訶僧祇律』の中で不浄であると反対されている。実際、Bareau[1955a]78もこの点を認めて、「十事」あるいは「金銀受納」が上座部と大衆部に分裂する原因でもなく、悪行を実践していた人々と大衆部を同一視することもできないと結論づけている。諸記述を尊重する限り、その判断は穏当であって、「十事」を実行していたVesāliのVajjiputtakaという比丘たちを後世の大衆部の起源と同一視し、これを根拠として、大衆部が上座部に比べ、戒律に関して緩んだ考え方を持っていたと判断するわけにはいかない。

もし、大衆部が実際に以上のようなことを行っていて、それに反対する上座部に反発して別に結集を行ったとすれば、大衆部関連の伝承には、自分たちの立場に関する説明があってもいいはずなのに、それさえ全く見当たらないのである。この三つの理由をもって、「十事」の判定が原因となり、上座部と大衆部の間に根本分裂が生じたというパーリ年代記の記述は信じ難いことになる。

### III. Mahādevaの「五事」について

次に、根本分裂をめぐる学者の見解の中で、分裂の原因として最もよく挙げられるのが、Mahādevaの「五事」である。既に述べたが、これを支持する代表的な意見は、Bareau [1955a]である。彼は、仏滅後100年、Vesālīで行われた結集の後、徐々に戒律に対し放任化した集団（すなわち後世の大衆部）が、仏滅後137年、Pāṭaliputraにおいて、Mahādevaの「五事」を原因として、分裂を起こしたとしている。また、Demieville [1951]239-96も、「十事」とともに「五事」が、大衆部の放任さを表わし出すものとして考えている。

この問題についてNattier & Prebish[1977]250-265は、「五事」の内容を一々検討し、これはDemieville[1951]やBareau[1955a]などが主張しているように、大衆部の戒律への寛容性を表すのではないことを明らかにしている。彼は、大衆部の中には、仏陀や菩薩を超世間的な存在として考える理想的な考え方を持っていた学派もいた反面、人間化された菩薩の概念を主張し、Stūpa崇拜と結合した献身的実践を低く評価する学派もあったことを指摘している<sup>15)</sup>。そして、後者は阿羅漢果よりは菩薩行を実践することを重要視した可能性を述べている。

Nattier & Prebish[1977]の主張を認める場合、この「五事」をきっかけに上座と大衆への根本分裂が生じたというSarvāstivādinの伝承も疑わしくなる。「五事」を言及する主な伝承の中で、これを認めたのは大衆部であり、上座部は反対したことが述べられているので、前者の中においてこのような見解が行われたことは認めなければならないだろう。しかし、Mahādevaの「五事」は、根本分裂の原因としてのみならず、大衆部の中では、実に、枝末分裂の原因としても述べられていることに注意しなければならない。例えば、『異部宗輪論』には、「仏滅後100年の時、四衆の間で大天の五事が議論になり、これを原因として上座部と大衆部との根本分裂が生じた。… 仏滅後200年に満ちた時、Mahādevaという出家外道があつて、彼は邪を捨て、正に戻つた。彼は、大衆部の中で出家し、具足戒を受け、多聞精進であつた。制多山(Caitya)に住みながら、この派の比丘たちに「五事」について詳細に説明し、この争論の結果、三部に分かれた。すなわち、制多山部(Caityāsāila)、北山住部(Aparaśāila)、西山住部(Uttaraśāila)である。」という、記事が見られる<sup>16)</sup>。

これによれば最初、分裂の原因になったMahādevaの「五事」が、100年後また比丘たちの間で議論になり、大衆部の中に三つの派を生じさせたということになる。確かに、最初から大衆部は、Mahādevaの「五事」を受け入れていて、後でそれに関してある比丘が詳しく説明したところ、比丘たちの間でその理解をめぐる意見の不一致が現われ、分裂に到つたという解釈も可能であるかもしれない。しかし、Mahādevaという名を持つ比丘が、根本分裂の際にも、また、枝末分裂の際にも同様にその分裂の原因を提供するというのは、どこか疑わしい気がする。恐らく、『異部宗輪論』のこの記事は、二つの伝承が混同されていると見た方が自然であろう。

Theravādinの伝承にもMahādevaと「五事」に関する記述が見られるが、二つは関連づけられていない。例えば、*Kathāvatthu* II, 1-5 (pp. 163-203)では、Mahādevaという名前とは無関係に「五事」を挙げ、批判している。また、パーリ文献には幾つかの場合、Mahādevaという名

前が見られるが、Aśoka王の時、Moggaliputtatissa長老によって派遣された伝道師の中の一人としてもその名が知られている<sup>17)</sup>。彼が派遣されたところは、PubbaseliyaやAparaseliyaが繁盛していたMahisamaṇḍalaであると言われている点からも<sup>17)</sup>、北伝に伝えられている、大衆部の枝末分裂に参加したMahādevaとの関連性が窺える。このように、Mahādevaと「五事」はお互い無関係に言及されることもあり、また加えて、上記で見たように、Bhavyaの*Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna*の第三説では、「五事」を説いた人としてMahādevaではなくBhadraという名前を挙げている。こうした点を考慮すれば、五事とMahā-devaのこの二つの関係は疑わしい。

総じて、以上のことを考慮する時、Mahādevaの「五事」が大衆部の放縦さを示し、それに上座部が反対し、分裂が起こったという伝承も十分に検討の余地が残っていることは分かるだろう。

#### IV. 分裂の主体

以上で分裂に関する主な伝承の内容を簡単に検討してみた。その原因を巡っては幾つかの伝承に分かれるものの、その結果として、上座部と大衆部に分かれたという点では一致している。確かに、諸律蔵に限った場合、分派に関する言及は全く見当たらないので断定的なことは言えないが、その他の伝承ではこの点は明確に示されている。

例えば、Theravādinの伝承では、仏滅後100年、Vesālīで律に違犯する「十事」を行っていたVajjiputtakaを後世の大衆部と考え、その「十事」を不浄であると批判し、反対したYasaを始めとするPāṭheryākaの比丘たちを後代の上座部として考えている。また、Sarvāstivādinの伝承では、阿羅漢の悟りを低く見るMahādevaの「五事」が争論を引き起こし、この見解を受け入れた側を大衆部として、反対した側を上座部と見なしている。一方、大衆部の伝承である*Śāriputrapariṣcchāsūtra*では、律を増広した側を上座部として、それに反対し、旧律を守ろうとした人々を大衆部として説明する。このように、全ての伝承が上座部と大衆部という二つへの分裂を話していることから、何か性格の異なる二つの派があったことは確かだと考えてよい。

しかし、具体的にどうその性格が異なるかという点になると、問題はもっと複雑になる。従来の最も一般的な考え方は、上座部を長老保守派として考え、大衆部を戒律や教理の面で自由、あるいは放縦であった進歩派として把握することであろう。例えば、Demieville [1951]239-96は、第二結集の当時、大衆部は戒律的に問題があったことを認め、Vajjiputtakaといわれる問題の比丘達を彼らと同一視し、また、「五事」も、彼らの放縦さを表わし出すものとして考えている。しかし、以上で考察したように、「十事」を巡って対立する二つの勢力についても、また、「五事」に対して相違する立場をもつ二つの勢力についても、この説明は受け入れられない。

ここで、大衆部の伝承とされる*Śāriputrapariṣcchāsūtra*の記述をみよう。この記述は、部派分裂を考察する上で、これまで必ずしも注目されてこなかったが、しかし、分裂の主体である大衆部が伝える、もう一つの伝承として看過してはならない。ここでは、上座部が根

拠なしに律の条文数を増広することによって生じた大衆部の反発の姿が描かれている。これは明らかに、以上の二つの原因、すなわち、「十事」や「五事」から窺えられる大衆部の性格とは全く異った印象を受ける伝承である。もし、この *Śāriputrapariṣcchāsūtra* の記述を尊重するなら、大衆部が上座部に比べ、戒律や教理の面で墮落していたと速断することはとうていできない。そこでは大衆部は、反対に、律を自由に増広しようとする上座部に反対し、旧律を守ろうとした、その意味で保守的な者たちとして描かれている。以上で挙げた幾つかの点を考えると、大衆部に関する従来の考え方には疑問が浮かび上がってくる。

それならば、いずれの伝承によっても一致する、分裂を起したとされるこの二つの主体は、いったい何物だったのであろうか。Hofinger[1946]183-195は、パーリ律に見られる Vesāli 結集の伝説で登場する Pācīnaka と Pāṭhēyyaka を、それぞれ東方と西方を指す言葉と理解し、また、東方とは大衆部を、西方とは上座部を意味すると考えて、この伝説を大衆部と上座部との東西の対立として説明している<sup>19)</sup>。この見解について、Bareau[1955a] 82ffは、諸律に見られる地名と比丘たちの所属の関係を考察し、「物語によって与えられるような断片的な情報から、部派の原始的・地理的分布の結論を引き出すのは軽率で、せいぜい一定の町あるいは地方に対する特定の部派の好みに注目することができるだけである」と結論を下し、Hofinger の見解を批判している。彼はまた、東方においては、多くの信者の帰依と布施によって、比丘たちが豊かで安楽であったので、自然に安易な生活になったはずであり、反面、Mathurā などの厳しい環境で、ジャイナ教やバラモンの苦行者に対抗して教化に従事した比丘たちは、当然厳格な禁欲主義を保たなければならなかったであろうとし、これを Vesāli 結集の伝説の背景として考える。

諸々の伝承に伝えられていることから判断する限り、Vesāli 結集の背景に二つの性格の異なる存在があったのは、確かであろう。しかし、彼らを、Hofinger が言っているように、そのまま東方＝大衆部、西方＝上座部と認めるほどの材料は手にしていない。われわれは上記で、Vesāli 結集の二つの主体をそれぞれ後代の上座部と大衆部に当てはめることを拒否した。Vesāli 結集で問題になったとされる「十事」は、教団がまだ一つの和合サンガとしての姿を保っていた時、比丘たちの間で戒律の実行に関する意見の不一致で生じた争論で、分裂の前奏曲のような出来事だったのでなかろうか。ただ、Bareau が言っているように、比丘たちは、自分たちが住していた周辺環境の影響を受け、その性格を変えていったのはあり得ることだろう。

その詳細は別として、もし厳しい環境下にあつて、厳格な態度を取らなければならなかった比丘たちが居た反面、恵まれた環境で、安楽な生活が可能な比丘集団も存在したという Bareau の大枠を認めるとすれば、それはどういう形となって表面化したと考えられようか。Nattier & Prebish[1977] と Prebish[1974] は、*Śāriputrapariṣcchāsūtra* の伝承に見られる根本分裂の原因に注目し、他の派の波羅提木叉の条文数に比べ、大衆部のそれが最も少ないこと、また、その条文数の差が、「衆学法 (Sekhiya dhammā)」から起こってくることを指摘する。以下、彼らの研究成果に助けられ、衆学法の内容を検討し、それを通じて分裂の背景を探ってみよう。

## V. 衆学法 (Sekhiya dhammā)

衆学法は諸律において、条文の数が不揃いであるのみならず、その内容にもかなりの相違点が見られる。諸律の中で、パーリ律と幾つかの漢訳律を挙げてみると、衆学法の条数は次のようである<sup>20)</sup>。

摩訶僧祇律	66
パーリ律	75
四分律	100
五分律	100
十誦律	107
根本有部律	99

一目でわかるように、摩訶僧祇律の条文の数が最も少なく、パーリ律以外の上座部の諸律における衆学法の数は100条以上にも及んでいる。

衆学法の条数が一致しないことについて、学者たちはこれまで様々な解釈を施してきた。先ず、平川彰[1960]465ffは、戒經に条数が明示されていなかった点に、大きな理由があると見なす。例えば、波羅夷法は四波羅夷法で、僧残法は十三僧残法で、他の七法には条文の数が示されているのに対し、「学法」のみは、「衆学法」（多くの学法）とのみいって、その条数が示されていないのであって、ここに衆学法の内容が増広改編される原因があったと考えている。そして、部派分裂以前の戒經において、衆学法がいかなる位置をもっていたかを問題にしている。

一方、Pachow[1951]59-60は、お互いに異なる場所に位置していた学派たちは、口伝によって条文を伝えていたので、その順序に多少差が出るのは避けられなかった点、さらには、衆学法は条数が決まっていなくて、学派たちは必要に応じてその数を増やして行ったであろうという点などを挙げて、律蔵の間に見られる相違を説明している。確かに、衆学法は条文の数が決まっていなくて、内容に変化を起しやすかったのであろう。しかし、これも波羅提木叉に一つの法として明確にその位置を占めている以上、少なくとも集団の認可を得ずして数を増やしたり、内容を変化したりするのは不可能であったと思われる。とすれば、どういう事情の下で、各学派の衆学法の数、内容には、このような相違が生じ、また、それは何を意味するのかは検討される必要があるだろう。

諸律に見られる衆学法は、その内容によって大きく七項目でまとめられる<sup>21)</sup>。すなわち、(1)衣および涅槃僧 (nivāsana) の着方に関するもの (2)俗家に行く時の行儀に関するもの (3)食事の作法 (4)説法の作法 (5)大小便に関する作法 (6)上過人樹戒 (7)仏塔に関するものである。この中で、諸律の間で、最も条数に相違を見せるのは(1)から(4)までの条文である。(5)については揃って三項目を挙げ、(6)に関してもパーリ律と僧祇律を除いたほとんどの律が一項目を挙げる。そして、(7)は四分律にのみ見られる内容である。

そこで、衆学法の全体的な内容を見ると、これは比丘の単なる日常のふるまいや行儀作法を示すというよりは、在家信者の請食に赴く時の比丘たちの作法を条文化したものと考えられる。というのも、比丘の日常の行儀作法は犍度部の「威儀犍度」にも、詳しく述べ

られているからである<sup>22)</sup>。衆学法は基本になる内容や形式の一致から判断して、なんらかの形でまとめられていたことは違いない。一方、四分律に見られる仏塔に関する二十六条からもわかるように、後からの増広も確かに行われたのであろう。これは、諸律の間に増広されて現れている条文、すなわち、基本になる条文を巡ってもっと詳しく述べられている条文にも当てはまる。例えば、衣および涅槃僧(nivāsana)の着方に関する規定の場合、摩訶僧祇律やパーリ律では「三衣を正しく着なさい」あるいは「涅槃僧を正しく着なさい」という二つの条文だけが述べられているのに比べ、他の上座部の諸律では、これに加えて、「飾り高く着てはいけない」とか「象鼻のように着てはいけない」とかの細かい禁止条文を付け加えているのである。

こうした細部にわたる相違は、Pachow[1951]59-60の指摘どおり、何か条文の数を増やし、厳しく比丘の行動を取り締まる必要が生じたことを物語ると考えられはしまいか。特に、(1)から(4)の条文をみると、パーリ律や僧祇律に比べ、説一切有部や根本説一切有部の律の方に甚だしい増広が見られるが、これは、後者のこれらの条文に関する特別な関心を示しているようである。四分律が自分たちの何らかの必要に応じて仏塔に関する条文を後から入れたように、有部や根本有部も、後から詳しい内容の条文を付加しなければならなかったそれぞれの理由があったことが想像される。

既に述べたように、衆学法はただ比丘の日常生活におけるふるまいに関する規定というよりは、俗家の請食へ行く時の着方や在家信者に説法する際の礼儀の集成と考えられる。この点を考慮すると、有部と根本有部の律で特に衆学法が詳しく述べられているのは、この二つの学派が、在家信者の視線を意識し、比丘が比丘らしく正しく行動することを通じて、在家人に尊敬され、その地位を確固たるものとすることを望んだのであろう。その意味で、僧院制度のより確かな意識を窺うことができる。

Prebish[1974]174は、MahāsāṃghikaとTheravādin, Sarvāstivādin, Mūlasarvāstivādinの四学派に見られる衆学法の内容を比較し、大きく四つに分けて説明するが、その中、衣の着方に関する規定に関して、MahāsāṃghikaとTheravādinに比べ、SarvāstivādinやMūlasarvāstivādinの方の条文数が多いことに注目し、「この後者の二つの学派は、最初から比丘の衣の着方に関心をもっていたか、それとも初期の単純な規則が十分でなく悪用されたので、後期にもっと厳しい一連の禁止規則が発達した」と、説明する。また、村を訪問する時の礼儀に関する条文で、村における比丘の正しい行動に最も関心をもつようになった原因を推測し、比丘と在家信者の関係を推測している。

ここでわれわれは、上述したBareau[1955a]の研究を想起することができる。彼は、西方と東方の環境差に注目し、それぞれの教団の性格を述べていたが、これは、「衆学法」の考察を通じて今までみてきた結論とも一致する。すなわち、西方へ進出していた比丘たちは、厳しい環境で、ジャイナ教やバラモンの苦行者に対抗して教化に従事しながら、もっと厳格な比丘の姿を保つことが要求されたのであろう。それは、在家信者の目を意識した結果かも知れないし、比丘自らの反省だったのかも知れない。すなわち、マガダを中心としていた原始仏教は、GaṅgāやYamunā両河に沿って西方へ進んで、新しい都市にその拠点を



なすに従って、仏教教団の間にお互い違った性格をもつようになったのであろう。それが具体的に現れてきたのが「衆学法」だったのではなかろうか。

確かにHofinger[1946]のように、東方＝大衆部、西方＝上座部と認めることには問題があるが、分裂に関する全ての伝承に、東西の対立が述べられていることには注目してよい。すなわち、諸律やパーリ年代記には、「十事」を行なっていた東方の比丘たちとそれに反対した西方の比丘たちが対照的に描かれているし、Mahādevaの「五事」を分裂の原因とするSarvāstivādinの伝承である『大毘婆沙論』でも、MahādevaがPāṭaliputraで「五事」を説いたところ論争が起こり、王が加入して、Mahādevaの衆に味方したので、「五事」に反対した他の長老たちは空中を飛んで西北のKaśmīraへ行ったことが述べられている。これらの記述から、根本分裂の背景には東方と西方という地域が何らかの関係をもっていたであろうことは否定できない。たとえŚāriputrapariṣcchāsūtraには、東西の対立を窺える言及はないとしても、この伝承で語られる律の増広に関する大衆部と上座部の対立は、以上のような背景をもっていることが「衆学法」から十分に推測可能なのである。

## VI. 結び

以上、根本分裂に関する幾つかの伝承を取り上げ、検討してきた。確かに、分裂に関する伝承は様々で、その内容において完全な一致点を探すことは難しい。ただ、全ての伝承から判断する限り、何か傾向を異にする二つの立場があったことは疑い得ない。仏滅後100年頃、Vesālīで起こったとされる「十事」や「金銀受納」をめぐる伝承は諸律に見られることから恐らく事実であろう。そして、Mahādevaが説いたとされる「五事」も大衆部の中で行われていた教理だったと思われる。しかし、以上で考察したように、これらを根本分裂の原因と見なすことはできない。

仏滅後、教団は次第にその範囲を広めて行き、教団の間には徐々に地域差に基づいた相違点が現れてきたはずである。それを裏付けるのが、波羅提木叉の中の「衆学法」であることを以上で見てきた。西や西北へと広がって行った仏教教団が、その環境下で生活しながら、もっと厳格な姿を保って、在家信者に接する必要が生じ、律、特に「衆学法」の条文数を増やしたのである。分裂の原因は、おそらく単一であることはなかっただろう。ある時期、同時に一つの問題をきっかけとして上座部と大衆部に分かれたとは思われない。すなわち、分裂は「十事」や「五事」のような、そしてŚāriputrapariṣcchāsūtraで見られる律の増広という具体的な問題をきっかけとして起こったと言うよりは、仏滅後、仏教教団がその教化範囲を広めて行ったことから生じた問題であったと考えられる<sup>23)</sup>。そして、Śāriputrapariṣcchāsūtraの伝承はこういう事情を暗示する記述として捉えられるべきである。

本論文では、Nattier & Prebish[1977]の研究に助けられ、従来、保守派である上座部に比べ、律や教理の面で厳格でない存在として描かれてきた大衆部に対する再評価を指摘した。今後、根本分裂の原因及びその過程を明かす、一つの手がかりとして、分裂の二つの主体であると伝えられる上座と大衆、特に大衆部の性格を解明していきたい。

<略語及び使用テキスト>

HR = *History of Religion*

IA = *Indian Antiquary*

IHQ = *Indian Historical Quarterly*

JAS = *Journal of Asian Studies*

JGJRI = *Journal of the Gaṅgānāth Jhā Research Institute*

JPTS = *Journal of the Pali Text Society*

JRAS = *Journal of the Royal Asiatic Society*

SIS = *Sino-Indian Studies*

(注記)

- 1) *Dīpavaṃsa*, iv; *Mahāvamsa*, iv. 44-53; v. 16-32, 55-59; *Samantapāsādikā*, pp. 33-37.  
諸律も *Vesālī* 結集に関して言及しているが、これをきっかけとして根本分裂が生じたとは記していない。
- 2) 『異部宗輪論』大正27, 15a15-17; 『大毘婆沙論』大正27, 510c23-512a19 など。
- 3) Frauwallnerは、律 (Vinaya) に関する議論が *Vesālī* 結集以外には、あまり重要な役割を果たしていないことから、恐らく教理の問題から学派は発生したのであると言っているだけで、具体的にどのような教理的な問題であったかについては言及していないようだ。
- 4) 本論では直接触れないが、仏教部派の発生に関しては、Bechert[1982]や Norman[1987, 1994], 佐々木[1988, 1992-95]の研究がある。彼らは、アソーカ王の碑文のうち、仏教サンガにおける破僧 (saṃghabhedā) を戒める内容をもつ一連の碑文と、第三結集及び仏教々団の分裂の関係について、様々に議論している。
- 5) 塚本啓祥[1966]152-171.
- 6) *Cullavagga*, XII.; 『摩訶僧祇律』大正22, 493a25-c11; 『五分律』大正22, 192a26-194b20; 『四分律』大正22, 968c18-971c2; 『十誦律』大正23, 450a27-456b8; 『根本有部毘奈耶雜事』大正24, 411c3-414b11; 『毘尼母經』大正24, 819b1-c12.
- 7) *Dīpavaṃsa*, iv. 47-53, v. 16-32; *Mahāvamsa*, iv. 9-66.
- 8) 註(2)参照。
- 9) *Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna*, by Bhavya: Sde-pa tha-dad-par [h]byed-pa dañ mam-par bsad-pa, No. 5640, Tr. Dipamkarasrijñāna, Tshul-khrims rgyal-ba, Vol. 127, 177a1ff.
- 10) 『舍利弗問經』大正24, 900aff.
- 11) 註(5)参照。
- 12) 『摩訶僧祇律』大正22, 493a25-c11.
- 13) Bareau[1955a]76fは、上座・大衆の二部に分かれない前の伝承では、金銭の受納だけが問題になっていた。それが上座部において、後で十事に増広されたと主張する。反面、Lamotte[1958]145fは、本来十事であったが、大衆部だけは、金銀の受納のみを禁止するために、初めの九項目を捨てたとしている。すなわち、Bareauは、これを根拠として、

大衆部は、最初は上座部と同様に厳しい態度を取っていたが、後で放縦になったという立場をもつ。

- 14) Hofinger[1946]153, 183-195, 金倉圓照[1962]242, 佐藤密雄[1963]44-52, 前田恵学[1964]577-579など。一方、「十事」の問題で根本分裂が起こったとする学者としては、Geiger[1912]intro, lxi, 宇井伯寿[1960]67-81, 平川彰[1960]683などがある。
- 15) Dutt, N[1970]68-72は、前者を「北(northern)あるいは、初期(earlier)大衆部」と読み、後者を「南(southern)あるいは、後期(later)大衆部」と呼んで区別し、Prebishもこれを受け入れている。
- 16) 大正49, p. 15a-b.
- 17) *Dīpavaṃsa*, vii-viii.; *Mahāvamsa*, xii; *Samantapāsādikā*, pp. 63-64.
- 18) Lamotte[1956]159.
- 19) Hofingerは、Przyluski[1926-28]の見解を受け継いでいる。
- 20) 平川彰[1960]464ff.
- 21) 平川彰[1960]467ff.
- 22) 平川彰[1960]470-471.
- 23) この考察は、Bechert[1982]67-68の理解とも揆を一にする点があろう。彼は、パーリ文献の徹底した検討の結果として、nikāyaというのは、お互いに自分らの具足戒(*upasam-padā*)の有効性を認め、もし、同一な界(*simā*)の中に住んでいるならば、一緒に律の儀式(*vinayakarma*)を行なう、比丘たちのグループを意味するとし、初期のnikāyaは、律の規則に関して同一な解釈を受け入れた比丘たちのグループであるという。

#### (参考文献)

- 片山一郎 [1989] 「十事(*dasa vatthūni*)について」 『パーリ学仏教文化学』3, pp. 15-40.
- 金倉圓照 [1962] 『印度古代精神史(中)』 東京.
- 佐藤密雄 [1963] 『原始仏教教団の研究』 東京.
- 塚本啓祥 [1966] 『改訂増補・初期仏教教団史の研究』 東京.
- 平川彰 [1960] 『律蔵の研究』 東京.  
[1974] 『インド仏教史(上)』 東京.
- Bareau, A. [1955a] *Les Premiers Conciles Bouddhiques*, Paris.  
[1955b] *Les Sectes Bouddhiques du Petit Vehicule*, Saigon.
- Bechert, H. [1982] "The Importance of Aśoka's so-called Schism Edict," *Indological and Buddhist Studies*; Volume in Honour of Professor J.W. de Jong on his Sixtieth Birthday, pp. 61-68.
- Demieville, P. [1951] "A propos du concile de Vaiśālī," *T'oung Pao*, vol. 40, pp. 239-96.
- Dutt, N. [1959] "The Second Buddhist Council," *IHQ*, vol. 35, no. 1, pp. 45-56.

- [1970] *Buddhist Sects in India*, Calcutta
- Frauwaller, E.  
 [1956] *The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature*, Rome.
- Geiger, W. [1912] *The Mahāvamsa or The Great Chronicle of Ceylon*, New Delhi.
- Hofinger, M. [1946] *Etude sur le concile de Vaiśālī*, Louvain.
- Lamotte, E. [1956] "Buddhist Controversy over the Five Propositions," *IHQ*, vol. 32, no. 2&3, pp. 148-162.  
 [1957] *Histoire du Bouddhisme Indien: des origines à l'ère Śāka*, Louvain.
- de La Vallee Poussin, L.  
 [1910] "The Five Points of Mahādeva and the Kathāvattu," *JRAS*, pp. 413-423.
- Masuda, J. [1925] "Origin and Doctrines of Early Indian Buddhist Schools," *Asia Major*, vol. 2, pp. 1-78.
- Nattier, J. J. & Prebish, C. S.  
 [1977] "Mahāsāṃghika Origins: The Beginnings of Buddhist Sectarianism," *HR*, vol. 16, no. 3, pp. 237-272.
- Norman, K. R. [1987] "Aśoka's Schism Edict," *Buddhist Seminar*, vol. 46, pp. 1-33.  
 [1994] "Aśoka and Saṅghabheda," *Collected Papers*, V., pp. 207-229.
- Pachow, W. [1951] "Comparative Study of the Prātimokṣa," *SIS*, vol. 4, no. 2
- Pachow, W. & Mishra, R.  
 [1952-53] "The Prātimokṣa Sūtra of the Mahāsāṃghikas," *JGJRI*, vol. 10, nos. 1-4, pp. 1-48.
- Prebish, C. S. [1974] "A Review of Scholarship on the Buddhist Councils," *JAS*, vol. 33, no. 2, pp. 239-254.  
 [1975] *Buddhist Monastic Discipline: The Sanskrit Prātimokṣa Sūtras of the Mahāsāṃghikas and Mūlasarvāstivādins*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- Przyluski, J. [1926-28] *Le concile de Rājagṛha; introduction à l'histoire des canons et des sectes bouddhiques*, Paris.
- Sasaki, S. [1989] "Buddhist Sects in the Aśoka Period(1):The meaning of the Schism Edict," *Buddhist Studies*(『仏教研究』), vol. 18, pp. 181-202.  
 [1992] "Buddhist Sects in the Aśoka Period(2):Saṅghabheda 1," *Buddhist Studies*(『仏教研究』), vol. 21, pp. 157-176.  
 [1993] "Buddhist Sects in the Aśoka Period(3):Saṅghabheda 2,"

- Buddhist Studies*(『仏教研究』), vol. 22, pp. 167-199.
- [1994] “Buddhist Sects in the Aśoka Period(4):The Structure of the Mahāsāṃghika Vinaya,” *Buddhist Studies*(『仏教研究』), vol. 23, pp. 55-100.
- [1995] “Buddhist Sects in the Aśoka Period(5):Presenting a Hypothesis,” *Buddhist Studies*(『仏教研究』), vol. 24, pp. 165-225.

1997. 12. 1. 稿

イザラン 東京大学大学院博士課程

A Reconsideration of the Cause of the Initial Schism  
in Buddhist Monasteries

Lee, Ja Rang

This paper will rethink the cause of the initial schism in Buddhist monasteries, a long-standing controversial problem, mainly with the help of two persuasive works, one an ancient text, the *Śāriputrapariṣchāsūtra*, which belongs to the *Mahāsāṅghika*, and the other a modern work by Bareau[1955a].

In explaining the characteristics of the subjects of the primary schism, Bareau[1955a] pays special attention to the general agreement of the accounts of the related materials, which always relate that the conflict was caused by the environmental differences between two groups, one a western group and the other an eastern one, although it is unclear which was the *Sthaviravāda* and which the *Mahāsāṅghika*, notwithstanding the arbitrary assumption by Hofinger[1946]. Bareau claims that the eastern monks must have lived a much more comfortable life provided with sufficient daily needs or facilities by a greater number of lay people as compared with the western monks, who seem to have been compelled to live an austere way of life in a rather infertile environment.

This suggestive observation leads us to another chronicle text, the *Śāriputrapariṣchāsūtra*, which informs us that there was a serious conflict between the *Sthaviravāda* and the *Mahāsāṅghika* concerning the question of whether it was possible to increase the number of *pātimokkadhammas*, with the latter severely accusing the former of arbitrariness in expanding the rules. This argument shows remarkable agreement with the fact that the number of rules in the existing *Mahāsāṅghika Vinaya* is much smaller than that of the existing *Sthaviravāda Vinayas*.

What is crucial here is that the difference in the number of rules is primarily rooted in the number included in the *sekhiyadhammas*, the *Sthaviravāda Vinayas* having almost twice the number of the *Mahāsāṅghika Vinaya*. *Sekhiyadhammas* are rules which are mainly concerned with the behavior or etiquette required of monks in daily life, especially in the presence of lay people, and most likely seem to have been compiled with the intention of keeping monks in the favor of laymen. The increase in the number of *sekhiyadhammas* in the *Sarvāstivāda* or *Mulasarvāstivāda Vinaya* is therefore considered to reveal their tendencies to rely on supplies by donations, not their adherence to an austere life.

All the relevant materials considered, a single cause of the first schism seems not only difficult to discover, and has not been to this day, but also less likely to have existed. In the course of time, as the Buddhist monasteries expanded, differences derived

from local distinctions must have been so distinctively manifested that all monasteries could not maintain their coherency and, as has been pointed out by Bechert[1982] with respect to *sīmā*, gradually divided one from another. The *Śāriputrapariprocchāsūtra* and the extant Vinayas suggest that this conjecture is highly possible.